中国惠州西湖の景観形成特徴と杭州西湖景観が及ぼした影響

A Study on Landscape Forming of Hui- Zhou West Lake in China and on Influence of Landscape Hang- Zhou West Lake

沈悦* 熊谷洋一* 下村彰男* 小野良平*
Yue SHEN Yoichi KUMAGAI Akio SHIMOMURA Ryohei ONO

摘要：本研究は、中国広東省惠州西湖の景観形成の特徴及び杭州西湖景観が及ぼした影響について考察することを目的とした。研究の方法は、関連する歴史資料や詩集図絵などの文献を調査し、その景観整備過程を辿りながら、地形図及び現地調査による視覚分析を行った。その分析結果と杭州西湖の景観構成との比較分析を通して考察を進めた。その結果、惠州西湖の景観形成の特徴として、以下があげられた。1) 杭州西湖景観の影響を受けつつも、立地条件に合わせた独自の景観形成を行った。2) 視点操作を主体に長い年月をかけて景観形成を行った。3) 杭州西湖景観形成手法に類似しているものの、名景化手法に特徴がある。

1. 研究の目的と方法

中国広東省の惠州西湖は、中国及び日本の造園に影響を与えた杭州西湖風景地と同様に、数百年にわたる景観に配慮した人工改造の歴史を有している。また、杭州西湖の景観形成に大きく貢献した蘇東坡が惠州西湖の景観づくりに参与したことにより、惠州西湖の景観も多くの人々に知られることになった。惠州西湖誌には「夫中国西湖三十六，唯惠州足並杭州（中国には36箇所の西湖があり、そのうち杭州西湖と並べられるのは惠州西湖だけである）」と記されている¹⁾。しかし近代以降、戦争、災害、また風景への配慮不足などの諸原因から、惠州西湖景観は荒廃が進み、忘れ去られて研究も進んでいない。本研究は中国名風景地の再整備の契機とするべく、杭州西湖の景観形成などの既存研究²⁾³⁾⁴⁾を踏まえた上で、惠州西湖を対象とし、その景観形成の流れを辿りながら景観形成の特徴、主要な手法を明らかにするとともに、杭州西湖の景観形成が及ぼした影響について考察することを目的とした。

方法としては関連する歴史文献、図絵、詩集などを収集し分析するとともに、現地調査及びヒアリングによる補完を行い、惠州西湖の沿革、立地条件及び景観上の形成経緯および杭州西湖との関連などを全般的に把握した。さらに地形図を基に惠州西湖周辺の主要な視点からの視覚分析を行い、その結果を杭州西湖の景観構成と比較し、その景観上の類似点・相違点を明確にした。そして杭州西湖の景観形成手法からの影響を考察するとともに、惠州西湖における景観づくりの考え方について検討した。

定量的に視覚分析を進める上で、惠州西湖周辺において、主要な視点と視対象を抽出し、数値地形モデル（DTM）を作成して、視対象の可視性、視距離、高低差、視角（仰角、俯角）の検討を行った。また構造物について、その分布や主要視点からの視距離の検討を通じて、構造物と他の景観構成要素の関係、配置を把握した。さらに塔のような大規模の構造物については、その構造物と他の要素（特に地形）との関係を定量的に検討し、杭州西湖と関連する名景について、DTMでパースを描いて検討を行った。そして、これらの視覚分析の検討にあたっては、同様の条件で分析した杭州西湖の視覚分析結果との比較検討を行った。

これらの作業は主に広東省国土庁・湖北省測絵局が1994年に測量した五千分の一地形図を用い、各文献上の古い地図・図絵⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾により、風景地の境界、施設、名景の姿などを補完的に参

照した。画像的情報に関しては1995年の現地調査（風景地範囲、地形・水系、各時代の諸施設の確認、地方管理部門のヒアリング等）の写真の他、過去の写真などの風景区資料⁹⁾から抽出し、現況との比較・確認を行い、補足的に参照した。

2. 惠州西湖の景観構成の特徴

（1）惠州西湖の景観構成分析

惠州西湖は広東省惠州市（経度140°17'，緯度23°3'）に属し、惠州市街地の西に隣接する湖である。歴史の過程で、湖岸が埋め立てられたり、湖面上に多数の堤や橋などが造られたが、それによって現在の西湖は五つの小湖により構成される姿となった（南湖，平湖，豊湖，鰐湖，菱湖と呼ばれる）。これらの各小湖がそれぞれに山と重なり合って、狭長で複雑な地形が惠州西湖景観の一つの特徴となっている（図-1）。

この惠州西湖景観は、杭州西湖と類似した雰囲気をもっているとされてきた。清時代（18世紀）の李仲昭が惠州西湖景観に関して「画卷西風繞旧遊，此身疑尚在杭州（微風を当たりながら画の如く風景の中で遊覧し回って、自分の身がまだ杭州にいと疑う

図-1 惠州西湖周辺の地形及び抽出した視点分布図

*東京大学大学院農学生命科学研究科

図-2 惠州西湖と杭州西湖の平面比較図

のだ)」と詠じたいわれる詩文がその一つである¹⁰⁾。惠州西湖は図-2のように、湖を中心として、三方を山に囲まれ、東側に惠州市街が展開してきた。これは杭州西湖の「三方山一方城」と同様の空間構成である。また惠州市及び杭州市の市街地の位置を比較すると、二箇所とも同じように西部の湖（西湖）と東部の大河（惠州の東江あるいは杭州の銭唐江）に挟まれた位置関係となっており、立地条件の類似性を見ることができる。

しかしながら惠州西湖の形状は、狭長で分散しており、さらに曲折した形を呈しているため、大部分の視点からは全体を見通すことができない。したがってこぢんまりとまとまった景観となっており、その点で杭州西湖と異なっている。近代の美術家は「西湖各有妙、此以曲折勝（各西湖は各々素晴らしい所を有しており、ここは曲折の景が最高だ）」と評価した¹¹⁾。

(2) 視覚分析

次に惠州西湖の見えについて視覚分析を行った。現代の地形情報ベースにして、歴史上の名景、名拠点及び現代観光動線上の拠点26箇所を視点として抽出し（図-1）分析を行った。

各山頂（視点が7箇所）から湖を見ると、図-3のように、手前の岸は俯角 10° 前後で、対岸の湖岸線は $1^{\circ} \sim 2^{\circ}$ で見ることができる。これは樋口の俯瞰景観に関する知見¹²⁾を参照すると、惠州西湖の眺望が主題として確保された上、湖面の開放感も感じられる景観であることがわかる。一方、湖中の島や湖岸などに存在する平地の視点（19箇所）から湖周辺の山々を見る場合、

図-3 山頂など高視点から湖の見え方（惠州）

図-4 山頂など高視点から湖の見え方（杭州）

図-5 平地の視点から惠州西湖周辺の山の見え方

図-6 平地の視点から杭州西湖周辺の山の見え方

仰角は 5° 以下の数値が多く（図-5）、囲まれ感の弱い「平遠の景観」¹³⁾と言える。これらの結果を杭州西湖のデータ（図4、6）と比較すると、次の結果が得られる：

①類似点：惠州西湖の湖面は杭州西湖の湖面より狭いが、視点から湖面までの比高が杭州西湖より小さいため（惠州の場合、比高が15m～100mの範囲であるのに対し、杭州の場合は、比高が概ね25m～300mの範囲）、俯角及び仰角の数値は類似している。また周辺の山に対する仰角も類似した数値を示しており、長い年月をかけて選択形成された視点が、結果的に杭州西湖と同質の景観体験を支えるものであったと言える。

②相違点：俯角の数値がより狭い範囲に偏っており、杭州西湖よりも広がり感に欠ける。惠州西湖による平地視点の場合、堤や島などの要素と山の組み合わせに層状の構成が見られるものの、杭州西湖景観構成の重要な特徴である洗練された三層構造の景観を形成しておらず、散漫化に陥っている。また、近距離に存在する低山の仰角が高く、遠視距の高山と交互にスカイラインを形成しており、より多様な景観が見られる点も指摘できる。これは湖が狭長かつ曲折していることが大きく影響していると言える。

そして、このような惠州西湖の自然風景の中に、過去の整備を通して人文景観が充実してきた。惠州西湖は杭州西湖に比べ堤の数も多く、また、小規模構造物（寺、小庭園、橋、閣、楼、亭など）も湖中の島、堤上、水辺、山中に数多く存在した（図-7）。規模が大きく注目される塔は、湖に接している低山山頂に位置していた。図-8は現代のデータに基づいて塔と山水の組合せを示している。この図を検討すると、塔が仰角にして $1.5^{\circ} \sim 10^{\circ}$ 程度の範囲で見られ、景観全体の中で大きく注目されることがわかる。

図－7 清時代の惠州西湖風景全図⁸⁾

(3) 惠州西湖の景観構成の特徴

以上の分析をまとめると、惠州西湖の景観構成の特徴として次のような結果が得られる。

①杭州西湖と同様、湖を中心とし、「三方山一方城」といった三方を囲まれ、一方開放された空間構成となっている。

②狭長・曲折の湖面形状のため、こじんまりとまとまっているものの広がり感が薄い景観を呈している。

③杭州西湖のような洗練された三層構造を欠いている。一方、狭長で曲折した湖周辺に視点が分布し、見通しを欠くものの、より多様・豊富な景観が見られる。

④人文景観が数多く存在し、重要な役割を果たしている。

3. 惠州西湖の景観形成

(1) 惠州西湖景観の変遷

惠州西湖の湖・山は地質学上の中生代第三紀に、地殻変動によって生成された。東晋時代(4世紀)には、湖周辺の最初の拠点として「興龍寺」が建立された。この「興龍寺」は唐の時代(7世紀)に「開元寺」と改称され、当時の名勝として「惠州風景」の初めての記載となった¹⁰⁾。同時代には湖の周辺に永福寺、西洲寺、無量寿院など、寺が次々と建立され、湖周辺の遊覧拠点が徐々に増えていった。また、湖畔の低山の山頂に大規模な構造物である西洲塔が建てられ、自然の山水に人文的な添景が与えられた。

宋の時代(11世紀)になると、惠州西湖の水利整備を目的として西湖に大規模な人工改造が行われた。まず地方官(領州)の陳称により、農業用の灌漑と湖を東西に横断する交通動線確保のため堤が造成された。この堤は湖の水位のコントロールにも使われた。紹聖年初(1094~1097年)、杭州西湖の景観形成に貢献した著名な文人・画家の蘇東坡が惠州地方官になり、在任の三年間に

惠州西湖の整備に腕をふるった。交通動線など諸問題を解決するべく永福寺の傍らに杭州西湖の「白堤」に似た「煙霞堤」¹⁵⁾、そして湖中央の東西両岸の間に長堤(蘇堤)及び橋(西新橋)を造った。さらにその橋の近傍に楼を建てて「壮其勢於上(堤に添景を加える)」¹⁶⁾とともに、堤上には杭州西湖と同様に柳などの植栽により修景を行った。後世の「西新橋記」には、「湖の西側へは、樵漁業者と寺などへの遊覧の人だけが行っていた。一本の葦を渡ただけでも渡れる程度の近さなのに、なぜ堤・橋が造られたのか、やはり湖・山の素晴らしさを引き出すこと、高い所まで登れ、山水が眺望できるためだ。それによって、惠州の偉観が成立したのであろう」と記されているという¹⁷⁾。修景上の意図的な整備であることを示す確証は得られないものの、優れた造景性から、その意図を読み取ることは容易である。また、蘇東坡は景観的な整備だけではなく、湖の周辺を巡り、風景を詠った詩文を残しており、惠州西湖景観の素晴らしさを伝え、当時の湖の風景地である杭州、潁州と同じ「名湖」のレベルに惠州西湖を到達させる上で大きく貢献した¹⁸⁾。惠州西湖が名風景地として確立したのはこの時期だったが、蘇氏の詩による「玉塔微瀾」の景観は惠州西湖の代表景として時代変化に影響されず現在に伝わっている。

明、清の時代になると、都市の拡大によって惠州西湖の南北が大きく開発され、土地利用も拡大して湖周辺に多くの堤、小橋、塔などが整備された。景観の観賞拠点や視対象の増加によって、景観も多様性を増し、惠州西湖の八景、十四景が選定されたことは当時の文献に記れているという¹⁹⁾。民国時代(1919~1949)になってからは、戦争のために山や丘が破壊されたり、交通量の増加により道路の整備や堤の拡幅が行われて、湖水面が縮小されることとなり、大規模構造物である塔が一つを残して破壊された。従来の惠州西湖の景観のスケール感が損なわれる事態となったことが推定される。1949年以降、新政府が都市の復興事業を始め、湖周辺の道路整備や古い文化財の修復、名拠点への亭、小橋、記念館等の付加など²⁰⁾、西湖景観の再整備が徐々に進んでいる。

惠州西湖景観は歴代の整備を経てきたもので、それに関わる人物は著名な蘇氏の他に、唐時代の僧伽、宋時代王象之、明時代祝允明、甘公亮、清時代呉騫等百余りの文人・地方官たちが西湖景観形成に貢献したことが文献にも記されている²¹⁾。

(2) 景観形成手法

(i) 視点および視対象の操作

蘇氏は惠州に在任中の3年間に、長堤や島、小構造物を整備し、湖面の分割や視点視対象づくりなど、惠州西湖景観の形成に大きく貢献した他、湖の周辺を視察、遊覧し、優れた景観について詩文などを残した。以下はその記載をもとに、蘇東坡の高く評価した視点(山頂など高視点)からの視覚分析結果である。図-9は

図－8 惠州西湖の視対象と重要構造物の見え方

図-9 山頂等高視点から湖中の島・堤の見え方
(蘇東坡高く評価した視点)

図-10 宋時代における杭州西湖周辺の山頂から湖中の堤の見え方

蘇氏によって整備が行われた後の惠州西湖において、周辺の山頂から湖中の島や堤を俯瞰した分析図である。杭州西湖(図-10)と比較して、湖中の視対象の数が多いことがわかる。その他惠州西湖の地形的特徴を考え合わせると以下の点が考察される。

- ①堤の造成によって狭長で曲折した湖面が区分され、複数の水域が形成された。それによって景観の分節感と奥行きが増強された。
- ②また堤は、各水域に整備された島とともに、加えられた風景要素として、新たな視対象となっており、豊かな水景を演出することにも貢献した。

図-11は蘇氏が高く評価した場所を視点(湖中の島、堤、湖畔の拠点など平地に位置している視点)とした場合の視覚分析図である。湖中の島・堤を見た場合、視距が0.35~0.9kmで、仰角は

図-11 平地の視点から各視対象の見え方(惠州)
(蘇東坡高く評価した視点)

図-12 宋時代における平地の視点から各視対象の見え方(杭州)

0.45°~1.7°の範囲が多いことがわかる。また湖畔に位置している低山を見る場合、視距の0.45~2km、また仰角1.7°~4°の範囲である。更に、湖から離れている標高の高い山を見る場合、視距が1.5~5km、仰角が2°~5°の範囲で多く見られることがわかった。このように堤や島は、水景に変化をもたらしただけでなく、景観の第一層を形成した。

また、これを同時代(宋)の杭州西湖のデータ(図-12)及び湖周辺の平地視点全体から見たデータ(図-5)と比較すると、蘇氏が選んだ視点から見た惠州西湖の景観は、宋時代の杭州西湖景観のように洗練された三層構造を呈してはいないものの、惠州西湖周辺の平地視点全体からの景観に比べると、三層構造の特徴がより鮮明になっていることがわかった(写真-1)。これら蘇氏が抽出した視点を検討すると、大部分が湖の中心部(平湖、豊湖)に位置していたことがわかる。宋時代以降、施設の整備が南北方向へ伸びること²²⁾によって新しい視点が増加し、景観が多様化して散漫化が進んだと考えられる。

(ii)人文景観の整備

一方、構造物に関しては、高さ30数m及ぶ塔が視覚的に目立つものであった。湖の中心部西岸の西山(湖畔の低山)山頂に建てられた泗洲塔は、その塔と山水に構成された景観の美しさが蘇東坡の詩に詠われ、著名な「玉塔微瀾(雁塔斜暉)」という名景が形成された。これは杭州西湖十景の「雷峰夕照」に類似してい

写真-1 元妙鏡前から煙霞堤方向を望む

ると評判になったものである。図-13は蘇氏時期(宋時代)に平地の各視点から見た泗洲塔と山水の組み合わせが形成した景観の視覚分析結果である(地形データは現代のもの)。泗洲塔は層構造の二層目に位置しており、仰角は4°~10数度で、目に入りやすく、立地した二層目の山を強調する役割を果たすとともに、風景に注視点を与え、添景として景観を引き締めしていたことがわかる(写真-2)。同時代の杭州西湖のデータ(図-14)と比較すると、景観構成上の類似性が確認できる。この「玉塔微瀾」の景観は、蘇東坡により定着させられ、年月を経て現在でも惠州景観の

図-13 惠州西湖における酒洲塔と視対象の見え方 (宋時代)

図-14 杭州西湖における塔と視対象の見え方 (宋時代)

代表景となっている。図-7によると、蘇氏以降、酒洲塔以外に、北部菱湖湖畔の万寿山低山山頂の「万寿塔」や、大河の畔に位置した「文星塔」(民国時期崩れた)が整備された。これらの構造物が分節された湖の各区域において、景観上の注視点となり、景観にまとまりを与えていた。これらの景観については十分な記録が残されておらず、杭州西湖の景観との直接の関連性を知ることができないが、重要な構造物の配置を通じて、景観にメリハリを与え、自然山水のポテンシャルを引き出すといった同じ手法が用

図-15 惠州西湖の明月湾から「玉塔微瀾」を望むパース (50m MESH)

図-16 杭州西湖の丁家山から「雷峰夕照」を望むパース (50m MESH)

写真-2 明月湾から「玉塔微瀾」を望む

いられていた点は指摘できる。

一方、小構造物に関しては、湖畔の初めての拠点である「興龍寺」が建てられたのが4世紀である。それ以降、寺、庭園、書院、小橋、四阿などの整備が徐々に進められ、市街地と山の間に位置する湖上、湖畔に隣接している山上にも散在するようになった。こうした構造物の配置も、杭州西湖に類似しており、都市から湖をへて、山につながる景観がスムーズに連続するように、人文要素と自然要素の巧みな融合が行われていたことが指摘できる。

上述した視覚分析の結果から、以下の点が考察される。

景観成立期に蘇氏が主導した島堤の整備は、景観上の分節感を与えた上に、湖面に第一層を加えることによって、水景演出に効果を与え、全体の景観に奥行感を与える役割を果たした。また、蘇氏が選出した視点からの景観は、地形上の制約から層状が明確でない惠州西湖景観の中でより三層構造が明瞭なものが抽出されている。さらに大規模構造物である塔は、景観に注視点を与えると同時に、杭州西湖景観と類似性を強調するものである。また、各時代の構造物の整備(社寺、庭園・橋などの整備)によって自然と人文との融合景観が形成され、徐々に理想の「境」へ近づけようとする動きとなっていた点も指摘できる。

(Ⅲ) 名景づくり

中国における歴史的な自然風景地は、地域の特徴を象徴する名景を有しており、惠州西湖にも「惠州八景」や「十四景」が存在している。しかしながらこれらの名景は同一レベルに並んでいるものではなく、歴史の中で度々強調された中心となる代表景が存在した(惠州西湖は「玉塔微瀾」という景観である)。

そして同時に蘇東坡ら文人による詩文や書画での活動を通して、特定の視点からの優れた景観を世に広め、惠州西湖を象徴する景観として定着させるという作業も行われた。この視点の整備とそこからの景観の著名化という形で進められる「名景づくり」は、蘇氏によって名景(視点)が選ばれ詠われて以来、数多く繰り返されてきた。定着した惠州西湖の名景の中には、杭州西湖の名景との類似性を指摘されているものがある²³⁾表-1が示す6景である。これらの「名景」について、DTMをもとに作成した透視図による類似性の検討を行った。図-15、16に示すのはその6景の一組の「玉塔微瀾(雁塔斜暉)」と「雷峰夕照」景観のパスである。画中有る堤、湖畔

表-1 杭州西湖名景に対応した惠州西湖の景観

杭州西湖景	杭州西湖景	杭州西湖景	杭州西湖景
①点翠洲-----三潭印月	④曲院風荷-----曲院風荷		
②煙霞堤-----白堤	⑤玉塔微瀾-----雷峰夕照		
③孤山-----孤山	⑥蘇堤玩月-----蘇堤春曉		

の低山、背景となった遠視距の高山、そして配置された構造物などによって形成される景観には杭州西湖景観との類似性が読みとれる。これらの6景は、杭州西湖により近い洗練された景観が選ばれていると言えよう。

以上のように、文人などによる文化的活動を通して「名景化」を行い、より洗練された景観によって惠州西湖全体の景観を代表させて、惠州西湖を印象づける手法の活用は、惠州西湖の特徴とも言うべきものであろう。そして、一つの景観を名景として定着させていく過程において、既に評価を得ていた杭州西湖の名景との類似性の強調が重要な役割を果たしたと言える。

4. まとめ

前述の分析結果をまとめると、惠州西湖の景観形成の特徴として下記の点があげられる：

(1) 杭州西湖景観の影響を受けつつも、立地条件に合わせた独自の景観形成を行った。

惠州西湖の景観は大スケールでの立地条件や空間構成において杭州西湖と似ていること、そして景観形成の契機を与えた蘇東坡が杭州西湖の景観形成にも大きな影響を及ぼした人物であったこと、また、杭州西湖が同条件の景観モデルとして先駆的に高い評価を得ていたことから、杭州西湖と潜在的に深く関連し、その影響の下に景観形成が展開した。しかし、土地の条件を十分に活用して特徴ある景観を創出することが風景地における景観づくりの共通の課題である。惠州西湖は歴代の文人などによる整備の結果、狭長で曲折した湖の形状と、周辺の山の平・立面ともに変化の多い地形が活かされ、空間分節によって奥行感を増加させつつも、こじんまりとまとまりが感じられる独自の景観が形成された。

また小構造物の密度高い配置や大規模構造物(塔)による景観の引き締めなど、人文景観への依存度が高い点も、文人や地方行政官が景観形成の主体であったという惠州西湖の独自性が生み出した景観の特徴と言える。

(2) 視点操作を主体に長い年月をかけて景観形成を行った。

中国における歴史のある著名風景地の形成は、皇帝との関わりが深い場合が多く、その皇権と大量な資金のもと、風景地のマイナス面に対して大規模な改造を行い、理想的な景観を創出してきた。北京の頤和園も杭州西湖景観をモデルにし、湖・山に大規模改造を加えた名勝地の例である⁴⁾。しかし惠州西湖の場合は、文人・地方行政官が景観づくりの主体であり、皇帝による景観形成に比べ段階的、長期的であり、視点操作に比重がかけられている点が特徴である。数百年をかけて徐々に構造物を整備しつつ湖周辺に適切に配置し、さらに詩文・絵画で惠州西湖景観を潤色する活動を通して視点や景観を定着させていった。

(3) 杭州西湖における景観形成手法に類似しているものの、名景化手法に特徴がある。

蘇氏の時代、惠州西湖の中央部を三層構造に近づける工夫が見られ、杭州西湖景観形成に見られた「層化」手法²⁴⁾が惠州西湖でも展開された。また、社寺林をはじめ大小様々な構造物を山・湖・都市の間に適切に配置し、人工と自然が調和した景観形成を図ることで、仙境の追求や「境化」手法が意識されたことが考察される。そして、惠州西湖景観のシンボルである名景や、代表景の創出の際に、杭州西湖における名景との類似性を強調した視点の選定や景名の導入を行い、杭州西湖に準じた風景地であることの印象づけを図っていった。このような「名景化」、つまり都市に隣接した風景地の人工改造を避け、杭州西湖の名景との提携によって惠州西湖景観の質的な昇華を図った点は、惠州西湖における文人が主体の景観形成の重要な特徴と指摘できる。

以上、層化や境化など杭州西湖の景観形成手法との類似性が見られるが、名景化手法に惠州西湖における景観形成の特徴があり、景観形成の主体が文人であったことの影響を見ることができる。

参考文献

- 張友仁(1989): 惠州西湖誌: 広東省高等教育出版社(複製版), 322
- 沈悦・熊谷洋一・下村彰男(1995): 中国西湖の景観構成とその形成に関する研究: 造園雑誌 58(5), 156-160
- 林福昌(1993): 西湖景観芸術美的探討: 北京園林 25(3), 10-15
- 沈悦・熊谷洋一・下村彰男・小野良平(1997): 北京頤和園における景観形成と西湖景観の影響について: 造園雑誌 60(5), 577-582
- 天一閣蔵明代地方志(明): 正徳潁州志: 上海古籍書店, 3
- 前掲書: (1), 巻頭頁
- 前掲書: (1), 巻頭頁
- 惠州市園林管理局編(1995): 惠州西湖新誌 資料編・図-1
- 惠州市園林管理局編(1982): 惠州西湖風景区資料集: 4-11
- 前掲書: (1), 88
- 前掲書: (1), 9
- 樋口忠彦(1975): 景観の構造: 技報堂, 44
- 前掲書: (12), 61
- 前掲書: (1), 4
- 前掲書: (1), 54
- 前掲書: (1), 49
- 前掲書: (1), 48
- 前掲書: (1), 85
- 前掲書: (1), 10-12
- 前掲書: (8), 84-114
- 前掲書: (1), 215-261
- 前掲書: (8), 81-83
- 前掲書: (1), 3-54
- 前掲書: (4), 160
- 王象之(宋): 輿地紀勝: 第99巻, 4-6
- 広東省惠州園林管理局(1982): 惠州西湖園林風景区的形成和特点: 広東園林 (13), 37-41
- 陳志華(1989): 文士園林試論: 建築師(36), 中国建築工業出版社, 179-188

Summary: The aim of this study is, 1) to make clear the features of landscape forming of the Hui-Zhou West Lake in Guang Dong and 2) to make clear influence from Hang-Zhou West Lake in landscape forming.

Two methods are applied in this paper. Firstly, based upon local investigations and surveying literature, the process of landscape forming is made clear. Secondly, based upon quantative visual analysis to clear the landscape composition, the characteristic is found through comparing the landscape composition of Hui-Zhou West Lake and Hang-Zhou West Lake.

In conclusion, the features of landscape forming of Hui-Zhou West Lake are 1) it is influensed by landscape of Hang-Zhou West Lake, but it showed a unique forming through combining the topography. 2) The important formul is that make good points of view to see landscape through the long long time. 3) The forming methods appear in resemblance between Hui-Zhou West Lake and Hang-Zhou West Lake, and the "creating typical landscape" is main feature.